

水稲品種「夢つくし」の安定した良食味米生産のための窒素吸収パターン					
[要約] 「夢つくし」の安定した良食味米生産を行うためには、 <u>窒素吸収量</u> を幼穂形成期までに5～6kg/10a、穂揃期までに8kg/10a、成熟期までに9kg/10a以下とする必要がある。このときの <u>玄米タンパク質含有率</u> は6.5%以内となる。					
担当部署	生産環境研究所・化学部・作物栄養研究室			連絡先	092-924-2939
対象作目	水稲	専門項目	肥料	成果分類	技術改良

[背景・ねらい]

「夢つくし」ブランドは県下において良食味米として定着しているが、生産現場においては過剰施肥による玄米タンパク質含有率の上昇が見られ、食味の低下が懸念されている。また一方で、イネに吸収されない過剰な肥料成分は農業生産系外へと排出されることから環境への負荷が少ない施肥法が望まれている。様々な土壌条件の生産現場において、食味を安定させるとともに環境への負荷の少ない合理的な施肥指導を行うためには、「夢つくし」の生育時期別の適切な窒素吸収量を明らかにする必要がある。そこで、環境にやさしい、良食味米生産のための窒素吸収パターンを解明し、施肥指導のための基礎資料とする。(要望機関名：八幡農林(H11))

[成果の内容・特徴]

1. 穂揃期及び成熟期における窒素吸収量が増加すると食味は低下する傾向にある。安定した良食味米生産のためには、穂揃期及び成熟期窒素吸収量をそれぞれ8kg/10a、9kg/10a以下に抑える必要がある(図1)。
2. 穂揃期窒素吸収量を8kg/10a以内とするためには、気象条件により変動は大きいものの穂揃期と幼穂形成期との窒素吸収量の関係から、幼穂形成期の窒素吸収量を5～6kg/10a程度に抑える必要がある(図2)。
3. 上記の各生育時期別の窒素吸収量の基準値を達成した場合、m²当たり粒数は260～280百粒となり、玄米タンパク質含有率を6.4～6.5%に抑えることが出来る(表1)。

[成果の活用面・留意点]

1. 環境にやさしい、食味向上のための施肥基準設定の基礎資料として活用できる。
2. 山ろく～平坦地の6月上～中旬移植に適用する場合、地力が高い圃場においては現行の施肥量から基肥窒素を0.5kg/10a程度削減する。また、穂肥については地力によらず、1回目のみ基準量を施用し、2回目は省略する。

[具体的データ]

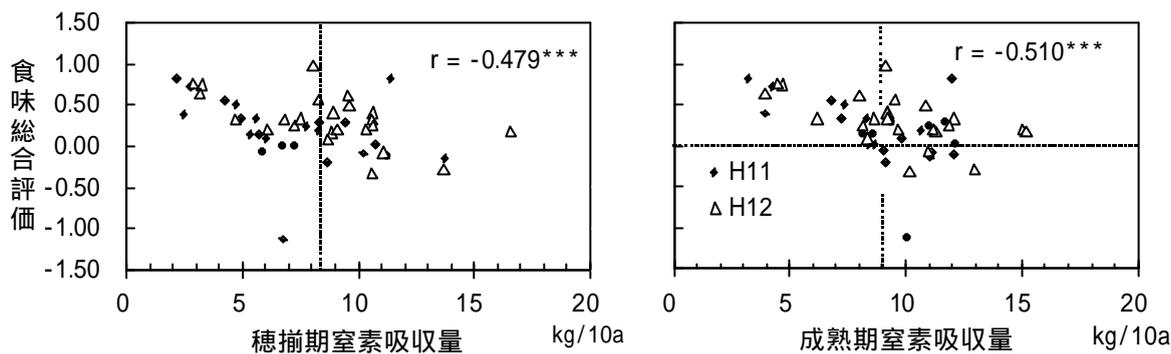


図1 穂揃期及び成熟期までの窒素吸収量と食味総合評価との関係
 注) 1. 食味総合評価の基準は農産研究所産コシヒカリ。
 2. ***は0.1%水準で有意。

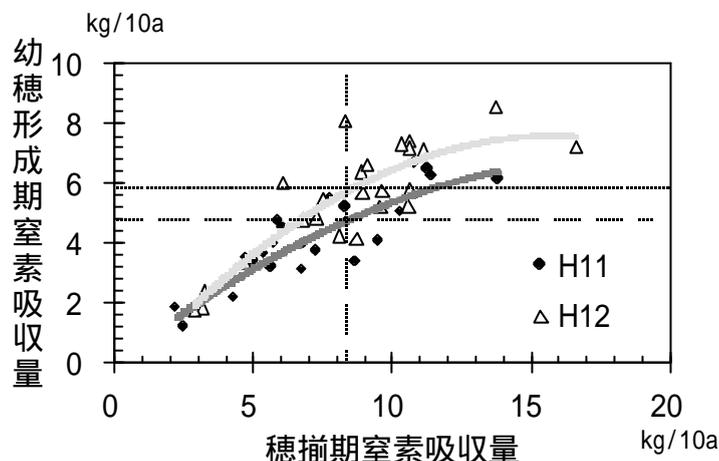


図2 穂揃期までの窒素吸収量と幼穂形成期までの窒素吸収量の関係

表1 穂揃期及び成熟期までの窒素吸収量に対応する収量・品質

年次	穂揃期の窒素 吸収量 8 kg/10a に対応する m ² 当たり籾数 (× 100粒)	成熟期の窒素吸収量 9 kg/10aに対応する	
		収量 (gm ⁻²)	玄米タンパク質 含有率 (%)
H11	260	430	6.5
H12	280	540	6.4

注) 玄米タンパク質含有率は窒素含有率にタンパク質換算係数5.95を乗じたもので水分15%に換算している。

[その他]

研究課題名：環境負荷軽減のための良食味新品種に対する施肥法
 予算区分：経常
 研究期間：平成12年度（平成11～14年）
 研究担当者：荒木雅登、山本富三、満田幸恵